



小学校廃校の見通し

過疎化が理由 入学生徒なし

黒滝小学校を「廃校にするか、休校にするか」の話合いが、一月三十日、黒滝小学校で開かれました。

市側からは、門田教育長、教育委員ら教育委員会関係者が出席し、地元からは黒滝（八戸）、大改野（五戸）、桑の川（十二戸）、中の川（三戸）、井の沢（三戸）の各地区から約二十人が出席し、話し合いがもたれました。

まず、教育委員会側から「今年三月三十一日で、黒滝小学校を廃校にするか、休校にするかについて、

入学する生徒の見通しがなくなったことにより、廃校か休校かの処置をとることになった黒滝小学校で、市側と地元との話し合いが1月30日開かれました。

黒滝、大改野、桑の川、中の川、井の沢の各地区から出席があり、「廃校か休校か、現在の校舎をどうするか、校舎の利用方法、などについて、熱心に話し合われました。

また、廃校となればこの教育施設をどのようにするか、について意見を聞かせてもらいたい」というあいさつがあり、その理由として、「昭和三十年からこの黒滝の地に、来て二十数年になります。ここでの歴史を閉じる段階にきています。市内での廃校の例としては、瓶岩小が久乳田小に吸収合併されましたが、それは公害が理由でした。今回は過疎の問題であり、必然的にどうしようもない状況にあります。何らかの処置をしていくうえで、地元の人々の意見を聞き、

これに対し、「廃校か、休校か」の問題では、「対象となる戸数は三十戸くらいあるが、若い者は出ていってしまっている。みんなが家のあとを継いでくれば問題はないが、思い思いの職業に就き生徒が入学するという見通しがないのではないかと思う。」「二、三年先の生徒のメドもなく、特産物があり家族が引越してくるということも考えられない。」「複式学級で続けるのが子供のためによいのかどうかという問題もある。現在の状況を基盤として、残念ながら廃校にふみ切るべきだ」という意見が地元から出されました。

市側からは、「生徒の見通しが無いのに休校というわけにはいかない。管理面などいろいろな

岡豊では 市政報告会

十二月市議会で「公約」となっていた市政報告会が、一月二十五日、市農協岡豊支所で開かれました。

市側からは、小笠原市長、国沢助役ら関係者が、地元からは約三、四十人の住民が出席しました。

まず、市長が当面する諸問題などについて説明の後、「土地地区画整理事業の進め方」というスライドを視聴し、質疑に入りしました。

質疑では、医大周辺の市街化の問題が中心となり、それについて市側は「地元のみならず町づくりにも積極的に取り組んでいく」という考えで、あれば飛び地市街化の方向づけができるでしょう。その時は岡豊の土地の約三〇％の減少が必要となるでしょう」と見解を示しました。

その他に、三十二号線を中心とした町づくり、高速道路、米の生産調整などについて、意見交換がありました。

黒滝

問題があり、その場合は廃校にさせていただきます」と説明。

これについては、出席者全員が廃校もやむをえないという意志でした。なお、正式な意志表示は地元でまとめて提出することになりましたが、黒滝小学校は今年三月三十一日限りで廃校となる見通しとなりました。

現在の校舎については、「校舎を建設するに当たっては、上倉村当時に村民の努力によって造成したもので、大水の時には崖くずれの危険性があります。完全な防災対策をしてもらいたい」という要望がありました。

校舎をどう残して、どのように利用するかについては、「夏は林

間学校やキャンプ場に。」「会社の家族寮や貸別荘に。」「中央の校舎は取り壊しを」という意見が出ました。また、市側からは「一つの的方法論として、委託料を設けて地元の人によってもらおう」という提案が示されました。

この会では、校舎等を今後どうするかについて具体的には決らな

かったものの、代表者を選んで詳しい話し合いが続けられることになり、三月末までには結論が出されることとなります。

欧州行政視察を終えて⑤

市長 小笠原 喜郎

続ヘルシンキ「タピオラ」
タピオラとは、フィンランド人によって語り伝えられた森の王様の名前である。この国の民族らしく偉人の名をたたえて名付けられているのか、ご自慢の線のガーデンシティー、タピオカ団地である。

十月十一日の朝、中央駅の見えるソコホテルを出て十時、日程に従ってヘルシンキ市役所を表敬訪問する。ていねいに迎えられるシメツズ氏から市の自治権、特異な行政機構、財政事情等について説明を受けた。市長は市長選出委員会によって選ばれ、六人の副市長を任命する。説明をしてきているシメツズ氏は副市長の一人であった。副市長の下に九人のそれぞれの

部門の担当官がいる。市議会議員は八十五名で、この中から行政担当官が選ばれることもある。政党は九つに分れている。議員の任期は四年間である。市税は、一律一五割の所得税が約四〇割をしめ、あと約六〇割が港税、ガスの事業税である。概略ながら、自治を尊重する共和国の首都にふさわしい行政の特徴をうかがい知ることができた。

次の日程、青少年センターではこの指導員ボヒョーラ女史の説明を受けた。フィンランドでは青少年の団体に、政治団体から宗教団体、スポーツ団体から禁酒団体にいたるまで数も種類も実も多い。これらの団体の市民活動費の八五割まで法律、政令によって財政援助が行われている。例えば、禁酒

団体には保健民生省の補助金が出る。各市町村には青少年委員会とユース・ワーカー（青少年指導員）といえよう。委員会は幅広い接触、提言を行い、青少年活動に必要な施設、用地を確保し、建設もする。このように青少年活動に力を入れているのは、かつて当面した戦争孤児、戦争未亡人対策等も大きな原因の一つであったとも想像される。現在要請されている直接の原因は、何といても働く婦人が多いことであろう。非行青少年についての現状ならびに将来発生する懸念はないかとの質問には、現状、将来ともそのような不安は持っていないと断言している。国および自治体の青少年指導対策についての自治体はどうかと聞いた。

外ではいつの間にか雨が降っていた。バスに乗って、いよいよタピオラ団地の視察に行く。案内役のイーニケアイネン女子はスチ

ユワーデスの経験があり、観光客とともに京都、奈良を見物している。東洋的なその優雅さをなつかしそくにほめた。日本語はほとんどできないが、英語がわかるのでいくぶん気が楽であった。旅行中、この国が好きになって、世界中で一番住みたい国だと信じ込んで、永住の地に決めている日本人松島青年がガイドとして乗り込んでいた。我々一行の空気が、あたたかく迎えてくれた今朝の市役所訪問以来徐々にほぐれて、なごやかになってきた。ほぐれていくので煙波で少々かすんでも、風光明媚な情景がいつまでも続いているが、二十分足らずで買物センターのある広場までバスは止った。すでに団地へ入っていたのである。このビルの屋上に上ると、団地の全貌をほぼ見渡すことができた。目の下に大きなプールがあり、その下には噴水が威

勢よく高く散っている。当団地は、ヘルシンキのベッドタウンの役目を果たすだけではなくて、計画人口一万六千人の職住近接の大都市をめざしている。

グリーンベルトをへだてて軽工業地帯がある。自然樹を残し、芝生、花壇を増加している。セントラルファイティングはもちろんのことだが、用排水、し尿処理も完備している。

高層住宅、低層住宅それぞれが自然の景観をそこなわぬように位置して建てられ、子供のある人は建物のまわりに木の多い家を配慮せられる。全ての家の設計が異なっていて、外から見た壁の色、内装までそれぞれ個性があつて、これが自分の家という感じを与えるよう気を配っている。土地代が全建設資金の一割だというのもうらやましい。タピオラに実現しようとした創設者の描いた理想は、着々と実現しつつあるかに見えた。